

2016年10月12日 数理社会学会機関誌『理論と方法』
オーガナイザ 小林盾編集委員長, 七條達弘編集委員

数理社会学会機関誌『理論と方法』で 「21世紀の社会学が解くべき問題」を募集します

【目的】

21世紀に入り社会がますます多様化するなか、我われが共同してアタックするべき「大きな問題」とはなんでしょうか。『理論と方法』では1995年に「数理社会学者の解くべき問題」を公募し、2006年に「計量社会学の発展とその課題」「数理社会学の発展とその課題」の2つの特集を組みました。一方、ボナシッチは2012年に、『数理社会学入門』のなかで以下の6つの「数理社会学が解くべき問題」を提案しました。

1 同類に影響された行動と、単なる集団行動は、どう区別できるのか。2 集団が二極分化し敵対することがあるのは、なぜか。3 社会的ネットワークは、どのように形成され変化するのか。4 フリーーライダーは、どうすれば抑制できるのか。5 複数ある中心性の測定方法に、どのように優劣をつければよいのか。6 人間集団の予測が難しいのは、人間が複雑だからなのか、無秩序だからなのか。

そこで、現編集委員会では、学会創設30周年を記念し、新たに「21世紀の社会学が解くべき問題」を募集します。今回は、数理社会学、計量社会学に限定せず、広く「社会学一般」を対象とします。21世紀社会学の「羅針盤」となることを企図しています。たとえば、以下のようなものが想定できるでしょう。

- ボナシッチのような理論的課題
- 「因果関係を特定することは可能なのか」「ミクロ・マクロ・リンクより適切な枠組みはあるのか」といった方法論的課題
- 「なぜ結婚するのか」「なぜテロが起こるのか」といった身近でありながら、社会学的に深い意義を含む実証的課題

「なぜ～？」「どのように～？」のような疑問形で提案してください。素朴な疑問、社会学の前提を問い合わせるようなものでも結構です。若手研究者も臆することなく、皆様からの積極的な応募をお待ちしています。

【募集要項】

- 募集期間：2016年12/1～12/31。
- 応募資格：会員、非会員どちらでも可。連名可。一人で複数の問題を提案する場合は3問程度まで。
- 募集内容：21世紀の社会学が解くべき問題とその説明。通常のリサーチ・クエスチョンよりは広い射程を含み、その問題を端緒に他の課題へと発展するようなもの。1995年、2006年、ボナシッチのものと類似しても可。
- 応募方法：メールのタイトルを「解くべき問題応募」とし、以下をtokubekiboshu@gmail.comに送付。
(1) 氏名、所属、(2) 問題（疑問形で、100字程度以内）、(3) 説明（背景、現状、解明する意義、未解明の問題点など、400字程度、多くても少なくても可、図表は1点まで可、専門外の人にも分かりやすい表現で）、(4) キーワード1～3個（必須ではない、公表されない）、(5) 公表時に匿名を希望するか。

【応募後の流れ】

必要ならオーガナイザが選別をし、『理論と方法』32巻1号（2017年3月刊行予定）に提案者の氏名とともに発表します（匿名可）。オーガナイザから補足や修正を求める場合があります。

2017年3月大会で、今回の応募内容をもとに「ミニ・シンポジウム」が開催される予定です。応募者のなかから数名に登壇してもらい、会員と広く問題を共有する場とします。登壇者の選択はオーガナイザが行ないます。